



宣教師たちの夏休み ～宮城学院宣教師たちの 軽井沢における別荘所有の変遷～

現代ビジネス学部教授 宮原 育子

はじめに

2016年に宮城学院は創立130周年を迎えた。この年、宮城学院女子大学には新しい学部として、現代ビジネス学部が開設された。東日本大震災後の変化する東北の地域社会の中で、営利・非営利を問わず多様なビジネスの場面で活躍できる女性を育成することが目的である。特に、観光や国際交流、地域ビジネスなど、女性が活躍している分野に注目している。

さて、現代ビジネス学部の新任教員として、宮城学院の創設時の歴史は大変興味深いものと感じた。特に、観光学の研究に携わる筆者が驚いたのは、宮城学院が近代日本の観光発展に大きく関わる、「日本三大外国人避暑地」のうち2か所に土地を所有していることである。日本三大外国人避暑地は、主に明治期の外国人宣教師たちが開いた3か所の別荘地を指し、宮城県七ヶ浜町の高山と、長野県軽井沢、野尻湖のことである。宮城学院は、このうち高山と軽井沢に土地を所有している。特に軽井沢は、現在も日本を代表する高級避暑地として名を馳せており、皇室関係者をはじめ、財界人、文化人など著名人の別荘が多数存在することで知られている。資料室やOGの事務職員の方に伺うと、軽井沢には、かつて宮城学院に関わりのあった外国人宣教師の山荘が存在し、2008年に老朽化のために取り壊されたことが分かった。資料室からいただいた2009年度の「宮城学院資料室年報」の資料紹介には、「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘ーハンセン宣教師資料からみるー」⁽¹⁾があり、その中でハンセンが軽井沢での生活を詳細につづった書簡の和

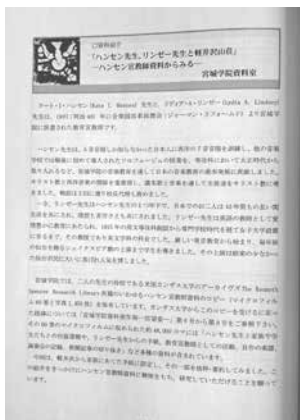


写真1.「宮城学院資料室年報
2009年度」

訳やその当時の写真などが紹介されており、この資料は、外国人宣教師による別荘地軽井沢の発展を知る貴重な手がかりであることが分かった（写真1）。

また、ハンセンとリンゼーの山荘は、1957年に宮城学院同窓会に寄贈され、使用されていた軽井沢彫のダイニングテーブルと椅子などは同窓会に保管されており、これらも当時の外国人宣教師の生活を知る上での大変貴重な資料であると考えられた。

そこで、本研究では、宮城学院の外国人宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷や彼らの夏休みの在り方を探り、近代日本における避暑地の誕生と観光の発展について考えてい



写真2.「宮城学院資料室年報
2011年度・2012年度」

きたい。研究方法としては、宮城学院の資料室に保管されている様々な資料と、軽井沢町史や、軽井沢の別荘の発展に関する学術論文や著書及び一般社団法人軽井沢会の「軽井沢ハンドブック」などの中から、宮城学院に関わった宣教師の名前を拾い上げながら組み合わせて、探っていくものである。なお、宣教師たちの来歴は、宮城学院資料室年報 2011年度・2012年度「創立 125 周年記念特集 宮城学院の宣教師群像 Since 1886」⁽²⁾ (写真 2) を参考にした。

本研究は、筆者が宮城学院女子大学に着任して 2 年目から着手したもので、キリスト者でもなく、日本のキリスト教史を学びながらの手探り状態であるため、不備な点やさらに検討を要する箇所が多々あるかと思われるが、まずは研究で得た知見を試論としてまとめる。今後は長年宮城学院の歴史をたどってこられた諸先輩方にもご意見や情報を賜れば幸いである。

1. E.R. プールボー校長の夏休み

軽井沢の話に入る前に、宮城学院初代校長 E.R. プールボー (1886 年着任～ 1893 年離任) と日本三大避暑地のひとつ、宮城県七ヶ浜町の高山についてふれたい。

宮城学院のスタートは、明治維新後の日本におけるキリスト教の宣教活動の一環としての女子教育のスタートであり、初代 E.R. プールボー校長をはじめ、アメリカ合衆国改革派教会から歴代の多くの宣教師たちが、言葉も文化も異なる女子たちの教育にまい進し、数多くの卒業生を送り出した。また卒業とならずとも宮城学院を縁として社会に羽ばたいた女性たちを見守ってきた。特に、プールボー校長の書簡⁽³⁾ (写真 3) からは、武家社会が色濃く残る東北に単身赴き、仙台に着任後すぐに女子学校を立ち上げる重い任務や、開学後の学校経営の困難さ、本国の教会との予算折衝や東北学院の押川方義や W.E. ホーイとの関係、生徒たちとの関係など、日々対応し解決すべきことが山積している中で、疲労しながら責任を全うしようと孤軍奮闘する姿が浮かび上がっている。その書簡の中で、プールボー校長が心待ちにしていたのが夏休みである。仙台滞在の後半には、宮城県七ヶ浜町の高山 (花淵浜) から本国へ発信した書簡も見られる。夏休みに仙台の雑事から離れて、七ヶ浜の海辺の空気に触れながら体力と気力を回復させている様子も書かれている。

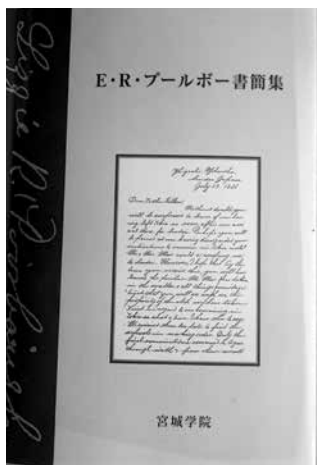


写真3.「E.R.プールボー書簡
集」

プールボー校長の書簡の発信地のひとつ「高山」は、宮城県宮城郡七ヶ浜町花淵浜字高山である。外国人の避暑地としての高山は、1888（明治21）年仙台の旧制第二高等学校（現東北大学）の英語教師であった米国聖公会の宣教師 F.W. ハーレルが狩猟で七ヶ浜町を訪れたことに始まるという。彼は、1887年に仙台神学校（現在の東北学院）に着任した米国改革派宣教師の D.B. シュネーダーとともに、日本人の友人の名義で高山を別荘用地として10年契約で借り受けた。その後、仙台在住の米国人宣教師によって7棟の別荘が建てられ高山の別荘地としての歴史が始まった⁽⁴⁾。

1890年には、米国から西洋野菜の種子も持ち込まれ、次第に外国人が増えていったという。1893年にプールボー校長が帰国するまでの夏は、高山の滞在が他の機関の外国人との交流や米国風の生活に触れながら、束の間、異国での雑事を忘れる機会になっていたのではないだろうか。

このように、明治期に来日した外国人宣教師たちは、初期のころから日本社会でのマイノリティとして教派を超えて交流し、結束を固めていったと思われる。特に教育関係に携わる宣教師たちは、夏にまとまった休暇を取ることが可能であり、夏休みを過ごすための別荘は日本での日常の過酷な環境を耐えるための必要不可欠な装置だったと考えられる。

プールボー校長が夏休みを過ごした高山の別荘は、本人が借りたのか、別の宣教師の別荘に滞在したのかは現時点では分かっていない。しかし、宮城学院が所有している高山の土地は、吉田浜で、プールボー校長が滞在していた場所とは少しずれるようだ。資料室の『80年史』⁽⁵⁾によると、1932年から宮城学院の高山海岸キャンプが始まり、1936年に土井晩翠が宮城学院に吉田浜字沢尻に所有していた土地500坪「心照荘」を寄贈している。この「心照荘」は、土井晩翠の長女照子が病死した地であり、土井晩翠は照子が宮城女学校で学んだ記念として寄贈したという。以降、戦争が激しくなるまで吉田浜で女学校のキャンプが行われたという記録がある。心照荘の碑は、現在七ヶ浜町波多崎にあるが、東北電力火力発電所の立地の際に宮城学院の土地を譲り、他の土地を譲り受けたということから、現在の場所は土井晩翠寄贈の土地ではないようだ。またその土地は訪ねる人もなく、荒地のままであるようだ。高山における外国人避暑地の形成の歴史は大変興味深いものがあり、これから述べる軽井沢ともつながりが予測されるが、今後の研究課題としたい。

2. 避暑地軽井沢のはじまり

外国人の3大避暑地のひとつ「軽井沢」は、現在の人口約2万人の長野県軽井沢町が中心であり、年間850万人もの観光客が訪れる日本有数の観光地のひとつでもある（図1）。

軽井沢は、皇室とも関わりが深く、多くの政治家、財界人、文学者や音楽家など著名な人々が別荘を持ち、社交の場としての避暑地として不動の地位を築いてきた。戦後は、大



図1. 避暑地軽井沢の地図 Google マップから
 (https://www.google.co.jp/maps/@36.371672,138.6076065,13z?hl=ja)

手デベロッパーによる大規模な別荘地や高級ホテル、リゾート施設などが整備され、軽井沢の大衆化が進められた。また、企業の保養所や、大学などの教育機関の研修所なども多く立地している。最近では、大規模なショッピングセンターも開設し、軽井沢の歴史探訪や観光以外の目的で軽井沢を訪れる人々も多くなった。

この軽井沢の避暑地としての発展の歴史は、『軽井沢町史』^{(6),(7)}の他、中島松樹編(1987)の『軽井沢避暑地 100 年』⁽⁸⁾や宮原安春(1991)『軽井沢物語』⁽⁹⁾に詳しいが、ここでは、軽井沢町観光経済課の資料「軽井沢案内 2018」⁽¹⁰⁾をもとに概述する。

軽井沢は、江戸時代、中山道の碓井峠越えの宿場町のひとつとして栄えたが、明治維新後は新道の開設などにより次第に衰退してきた。そうした中で、1886年にカナダ生まれの英国聖公会宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーと、東京帝国大学文科大学教授の J. ディクソンと内地旅行の途中で軽井沢に立ち寄った。その後、ショーは、つるや旅館主人の佐藤忠右衛門の斡旋によって、使われなくなった旅籠を買い取り、1888年には大塚山に移築した。その別荘では、軽井沢を来訪した友人の宣教師やお雇い外国人教師たちがショーとともに夏を過ごすようになった(写真 4、5)。

軽井沢町観光経済課の資料「軽井沢案内 2018」によると、1889年の夏には避暑客が 30 名を超えたとある。その後、鉄道の整備も進み、1893年には碓井峠にアプト式鉄道が導入され、横川から軽井沢間が開通し、人々は徒歩での山越えから解放され、東京から軽井沢までの移動が容易になった。また、福井県代議士で海軍大佐の八田裕二郎氏が日本人で初めて別荘を建て、日本の上流社会に紹介した。八田氏は、軽井沢を健康地でありスイス



写真4. A.C.ショーの胸像と記念礼拝堂 ショーによって創設された軽井沢最古の教会
このエリアが軽井沢避暑地発祥の地とされる



写真5. ショーハウス記念館 ショーが最初に建てた別荘を移築復元したもの

のモンブラン付近に優る避暑地であると喧伝した。同年には、外国人避暑客の指導によってかんらん（キャベツ）が初めて栽培された。その後、軽井沢への別荘建設は進み、テニスコートが開設され旅館は外国人専用のホテルへと改造が進んだ。1904年には、山本直良が西洋風三笠ホテルの建築に着手し、1906年には営業を開始する（写真6）。

このころまでに、別荘は102戸に増えていった。同年には、三井財閥の三井三郎助によって、日本女子大学夏季寮「三泉寮」が開設され、最上級生40名が3週間の滞在によってその教育に大きな成果を上げた。1897年には、D. ノルマンらを中心として、超教派的な合同教会、軽井沢合同基督教会（現ユニオンチャーチ）が創立された。1910年には総理大臣桂太郎が離山に別荘を建てるなど、軽井沢がますます名士の別荘地としてその名を



写真6. 旧三笠ホテル 国の重要文化財として内部も公開されている

馳せた。この年の避暑客宿泊者数は、日本人 5,406 人、外国人 6,597 人にもなり、延べ宿泊人泊は、約 12 万人泊を超えるようになった。1916 年には D. ノルマンをはじめ、内外人有志によって「軽井沢避暑団」が設立され、以来、軽井沢の避暑は、「来訪者の心身の鍛錬向上と文化教養に寄与するもの」とし、「会員は品行方正にして節操の人たるを要す」「飲む・打つ・買う」の追放など、今日の軽井沢憲法の原型が出来上がった。

1917 年以降は、日本人による別荘地開発が進み、西武の堤康次郎が、千ヶ滝の開発に着手し、別荘地は軽井沢町の様々な地域に拡大していく。

3. 軽井沢に最初に別荘を持った東北の宣教師

前述のように、1886 年に A.C. ショーが軽井沢に入ってから、大正時代にかけて軽井沢は急速に外国人宣教師や教師、外交官など様々な人々の別荘地として発展していく。佐藤・斎藤（2004）は、歴史地理学の観点から、地籍資料（土地台帳と公図）を用いて初期の別荘所有者の研究を行った⁽¹¹⁾。それによると 1905 年時点で、外国人別荘用地は 18 ヶ所であり、そのうち 8 ヶ所は 1892 年以前に登録されたものである。佐藤らは、この別荘は、1893 年に東京からの鉄道が開通するのを見越して建てられたと推測している。しかし、1893 年から 1899 年までは、鉄道が開通したにも関わらず、別荘用地は増加しなかった。その理由は、1899 年に不平等条約が改正されるまで、外国人は居留地とその隣接地域に居住地を限定されており、土地所有も禁じられていたためであると指摘している。従って、1890 年代の外国人別荘は、日本人の名義で土地が登記されていた。

佐藤・斎藤の論文では、1899 年のいわゆる国内雑居開始以前の軽井沢における別荘所有者は、プロテスタント宣教師が 6 名、横浜の商館が 2 件と、イギリス公使をあげている。6 名のプロテスタント宣教師の中に、活動地を仙台に持つ、アメリカ改革派の宣教師

「J.H.D. フォレスト」(まま)と記載がある。ジョン・キン・ホイド・デフォレストのことである。J.H. デフォレストは、アメリカン・ボードの宣教師として1874年来日した。彼は西日本で宣教活動をしたのち、1886年に家族で仙台に移住し、新島襄、富田鐵之助とともに宮城英学校の創設に携わる⁽¹²⁾。翌年、宮城英学校は東華学校となり、新島襄が校長、J.H. デフォレストは理事に就任する。東華学校は、1892年に閉校となるが、彼は1911年に死去するまで東北地方での救済活動に努めた。彼の2番目の妻、S.E. デフォレストは、1899年から1902年まで宮城女学校の音楽の教師を務めている⁽²⁾。

J.H. デフォレストの別荘は、1905年時点で旧中山道の西側の愛宕山山麓に位置する南高瀬という地域に位置していた。佐藤・斎藤論文によると、この別荘の用地は、まず1890年以降に聖公会司祭の杉浦義道の名義となり、実質は大阪の聖公会アメリカ人宣教師のH.D. ペイジが所有した。杉浦義道の父はペイジから洗礼を受けていたという。そして、内地雑居の始まった1899年に、その別荘はデフォレストの所有となっている。ペイジとはデフォレストが大阪で活動していた時以来の知り合いと考えられ、その縁で別荘の所有権を引き継いだと思われる。デフォレストの別荘所有は1905年時点で記録があるが、1925年には、所有者は外国人であることは示されているのみで所有者が不明となっている。デフォレストは、1911年に病を得て東京の聖路加病院で逝去したため⁽¹²⁾、彼の軽井沢での別荘所有は、1899年から1911年の間の数年であると考えられる(図2)。

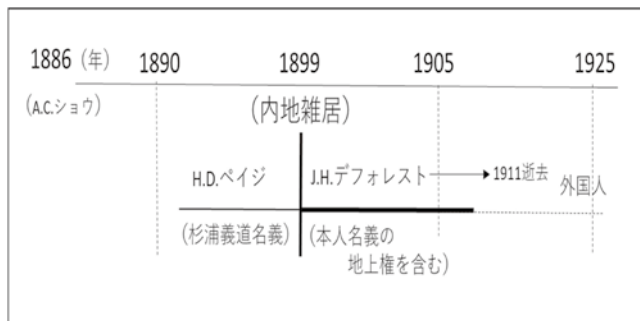


図2. 軽井沢町南高瀬のJ.H.デフォレストの別荘所有の変遷(佐藤・斎藤; 2004⁽¹¹⁾)をもとに作成) 1899年の「内地雑居」を機に日本人名義の外国人宣教師の別荘がJ.H.デフォレスト名義の別荘となっている。

4. 桜の沢 (ハッピーバレー) の宣教師たち (1908年～1917年)

1902年には、旧中山道の東側にある桜の沢に萬平ホテルが移転し、夏季には多くの外国人宿泊客で賑わうようになった。1910年ごろになると、軽井沢には外国人別荘が134軒、外国人向け貸別荘が25軒を占め、かつては宿場町の通りは、外国人向けの食糧や衣料品、雑貨などを扱う商店街となり、ここを中心として避暑地の中核が形成された。そして、その外縁部にも日本人の別荘を交えて別荘地が拡大してきた⁽¹⁰⁾。

萬平ホテルが移転した桜の沢には外国人の別荘が建てられていった。東北学院や宮城女学校にゆかりの宣教師たちも、この桜の沢に別荘を所有した。宣教師たちは、この桜の沢を「ハッピーバレー」と呼んだ。軽井沢では、1916年にD.ノルマンらによって避暑地の自治組織「軽井沢避暑団」が結成されたが、避暑団は1914年から毎年別荘のハンドブックを作成しており、避暑団が「軽井沢会」となった現在まで発行されている⁽¹³⁾ (写真7)。

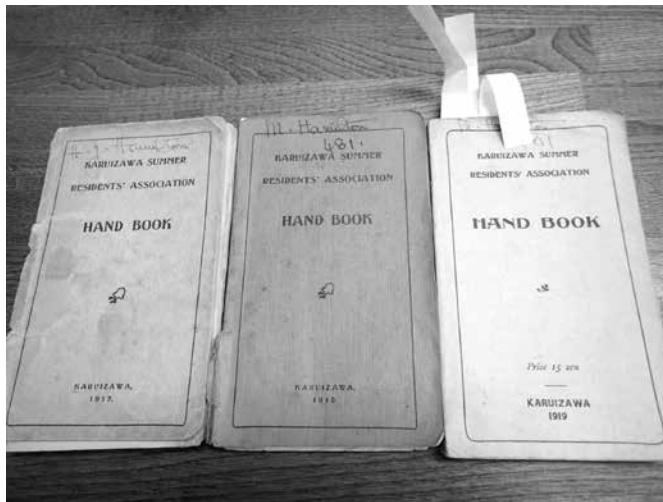


写真7. 軽井沢避暑団発行の「ハンドブック」1917年から1919年
一般社団法人 軽井沢会蔵 (2018年10月撮影)

筆者は、2018年10月に軽井沢会の軽井沢事務所を訪問し、1917年からのハンドブックを閲覧させていただいた。1917年のハンドブックには、J.P. モール、H.K. ミラー、W.G. セイプル、K.I. ハンセン & L.A. リンゼイの氏名が見え、この時期までにすでに宮城女学校関係者が、桜の沢に4軒の別荘を所有していたことが分かる。また、近隣には、A.K. ライシャワー、エドウィン・O. ライシャワー駐日大使の父の別荘もあり、ハンセンの書簡からライシャワー一家とも交流があったことが分かっている⁽¹⁾ (写真8、図3)。

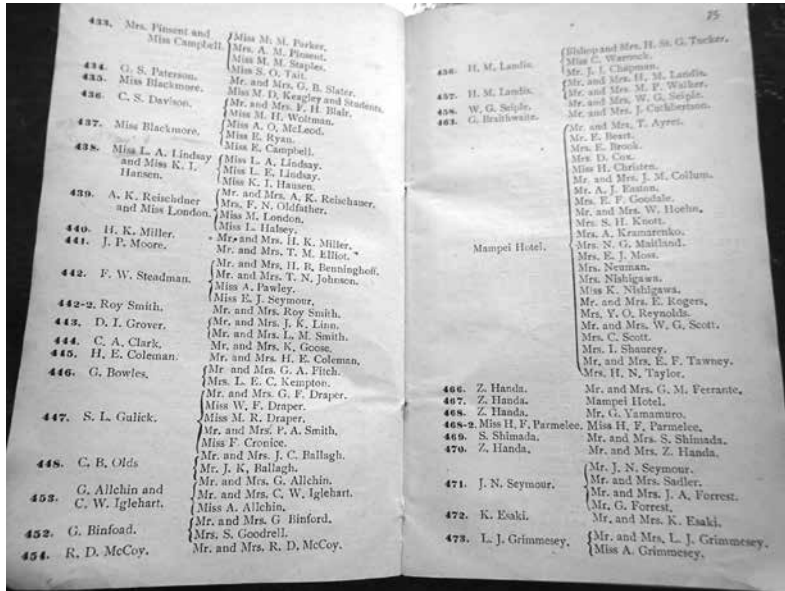
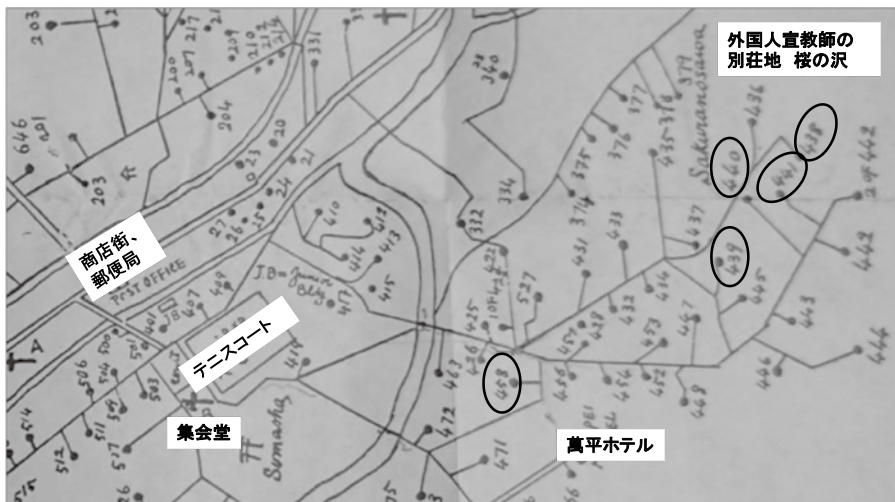


写真8. 1917年版ハンドブック 別荘番号と所有者、居住者名を示すページ
 No.438にリンゼー&ハンセン、No.440にH.K.ミラー、No.441にJ.P.モール、No.458にW.G.セイプル4名の宮城女学校関係者の名前と同居者の名前が示されている。No.439はA.K.ライシャワー所有。(2018年10月撮影)



別荘番号: 440 H.K.ミラー、441 J.P.モール、438 リンゼー&ハンセン、458 W.G.セイプル、439 A.K.ライシャワー

図3. 1917年の桜の沢の別荘位置図；桜の沢の別荘番号のほとんどは外国人名義である。別荘番号374～380は近江ミッションが所有している別荘で、19名の外国人名が登録されている。(1917年版軽井沢避暑団のハンドブック付録のマップに加筆作成)

この4軒の別荘の所有者の来歴について、宮城学院資料室年報(2012)⁽²⁾を参考に述べる。

J.P. モールは、1889年から1891年まで仙台神学校(現東北学院)で教会史とギリシア語を教え、1893年から1894年に宮城女学校の第2代校長を務めた。夫人のA.M. モールも副校長として英語と聖書を教えている。J.P. モールはその後、東京や米国を経て仙台に帰任し、1912年から1919年ごろまで東北学院の理事に就任している⁽¹⁴⁾。H.K. ミラーは、1892年から1895年に東北学院で教師を務め、その後、山形や秋田へ伝道し、1908年から1909年に宮城女学校第4代校長を務めている。1898年に彼と結婚した夫人のサラS. ミラーは、1908年から1910年まで宮城女学校で英語を教えていた。W.G. セイプル(以降サイプル)は、1905年から1936年まで東北学院の教師として勤務し、1908年から1911年は、宮城女学校の理事として聖書考古学を教授している。また夫人のF.L. サイプルは、1908年から1931年まで音楽(声楽)と英語の教師として宮城女学校に在籍した。K.I. ハンセンは、1907年から1951年まで校長代理や理事、音楽科学科長を務め、音楽、聖書、英語を教授した。L.A. リンゼーは、1907年から1951年まで、ハンセンと同様に校長代理や理事、英文学科長を務め、英語や聖書を教授した。

桜の沢の4組の宣教師たちは、それぞれ隣接する敷地に別荘を建てていた。4組のうち誰が最初に別荘を建てたかは定かではないが、J.P. モール、H.K. ミラー、W.G. セイプルの3名は、1917年当時は東北学院に所属していた。

宮城学院資料室年報(2010)の資料紹介「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘ーハンセン宣教師資料からー」⁽¹⁾の中では、ハンセンとリンゼーは1908年7月に初めて軽井沢を訪れ、以後、毎夏を軽井沢で過ごしている。1908年のハンセンの書簡では、日本に来て1年目の夏にミラー夫人の勧めもあって軽井沢で過ごすことにしたこと、軽井沢には、サイプルが連れて行ってくれたことが書かれている。また、同年8月の書簡でも軽井沢で行われたテニスの大会でリンゼーが参加したこと、男子シングルスでゾーグが優勝したことが書かれている。このことから、1908年までには、ミラーやサイプルも軽井沢に滞在しており、また、ゾーグ(東北学院神学部部長)と夫人(宮城女学校教師)も滞在していたことが分かる。軽井沢の宿泊先の手がかりとして、1910年の書簡には、「この別荘を毎年借りるなら、このミッションの不格好な家の少なくとも壁紙くらいは素敵にさせるわ。」という記述があり、ハンセンとリンゼーは自分たちの別荘を所有する前には、「ミッション」の別荘を借りていたことがうかがえる。1917年の軽井沢避暑団のハンドブックによると、桜の沢には近江ミッション所有の複数の別荘が存在しており、そこは貸し別荘だった可能性がある。そして、1914年8月の書簡には、ハンセンとリンゼーが、「ミラーの別荘の上の土地を買うことにした」ことが書かれており、1915年には「サイプルの別荘と同じようなパークハウスを建てるつもり」と伝えている。この記述から、ミラーやサイプルの別荘は、1914年までには建てられていたと推測される。そして、1915年7月のハンセンの書簡では、「軽井沢 自分たちの別荘に来て1週間がたつ」と書かれている。

同年 8 月の書簡には、別荘の様子と軽井沢での生活が詳しく書かれており、自分たちの別荘を持った喜びがつつられている。8 月の牧場への旅には、ハンセンとリンゼーとともに「サイプル夫妻、クリーテ夫妻、エドマンズ夫妻、アンケニー、ミラーが同行した」と書いてあり、1915 年ごろには、別荘を持たない東北学院や宮城女学校の関係者たちも軽井沢で夏休みを楽しんでいることがうかがえた。この時期には別荘を持たない外国人は、萬平ホテルや、貸し別荘などを利用できたことが町史などから分かっているが、ハンセンとリンゼーをはじめ、宮城女学校の関係者もそうした施設を利用したか、または、同僚の別荘に滞在したと考えられる。先述の東華学校の J.H. デフォレストの別荘所有は、1899 年から 1911 年と推測されるが、ハンセンとリンゼーが軽井沢を訪れた 1908 年には、既にミラーやモール、サイプルが軽井沢で彼と交流を持っていた可能性もある。また、ミラーやモール、サイプルの別荘所有のきっかけもデフォレストによるものの可能性が考えられる。

5. 1930 年の軽井沢避暑団ハンドブックから（花里論文を参考に）

1930 年の軽井沢における外国人宣教師の別荘所有に関しては、花里（2012a）の優れた研究がある⁽¹⁵⁾。花里は、1930 年版のハンドブックを使い、ハンドブックにおける外国人別荘所有者のリストと聖職者の所属団体の一覧表を作成している。それによると、この時期は、別荘数も 819 戸にのぼり、別荘を所有する外国人の 80% が宣教師であることが確認されている。また宣教組織も 29 と多岐にわたっていた。これは、1894 年からプロテスタント系の宣教師たちが超教派で「軽井沢会議」を開催して以来、1930 年で 29 回を数え、軽井沢がキリスト教系の宣教師たちの貴重な情報交換の場として定着していたと考えられる。

1930 年までに外国人別荘が増加したことから、郵便局所管の別荘番号の付け替えが行われた。

花里の作成した一覧表を確認して、1930 年時点で、桜の沢の宮城女学校関係者は、新たな別荘番号によると、1345 番ミラー、1273 番サイプル、1319 番ハンセン&リンゼーであり、モールの別荘は 1307 番 F.B. ニコデマスに所有が変わり、新たに 1306 番 G.W. シュレイヤーの別荘が加わっていることも分かった（図 4）。

F.B. ニコデマスは、1934 年から 1953 年まで宮城女学校の英語の教師と理事をつとめた E.N. ニコデマスの夫である。1910 年ごろには来日していた。花里（2012b）⁽¹⁶⁾によると、当時は、軽井沢において軽井沢避暑団が主催するテニストーナメントや、ゴルフ、音楽コンサート、チェスなどのレクリエーションが盛んに行われており、ジャパントイズ紙がそれらの行事を紙面に掲載していた。1930 年 8 月 5 日には、軽井沢避暑団主催のコミュニティコンサートの演奏者と演目一覧が掲載されており、それによると、コンサートでは、1 番目に別荘番号 1307 の F.B. ニコデマス氏と別荘番号 1312 の S. スミス氏が、パイ



図4. 1930年における宮城女学校関係の宣教師別荘位置図；No.1319 ハンセン&リンゼイ、No.1345 ミラー、No.1273 セイブル、No.1307ニコデマス、No.1306 シュレイヤー
(2002年輕井沢会ハンドブック付録マップに加筆作成)

オリンデュエット、ゲバウアー作曲「アレグロとロンド」を演奏し、6番目には、F.B. ニコデマス氏が、バイオリン独奏、チャイコフスキー作曲「アンダンテカンタービレ」を演奏したとある。このことから、F.B. ニコデマスについては、1930年には既に地元のコミュニティの一員として存在すると思われることから、1930年以前にJ.P. モールの別荘を引き継いだと思われる。J.P. モールについては、軽井沢避暑団のハンドブック1923年版にはまだ名前が記されているが、東北学院100年史によると、1924年に引退してアメリカに戻ったとあるので、F.B. ニコデマスがJ.P. モールから別荘を引き継いだのは、彼の帰国が理由で、それは1924年以降であると考えられる。

この時期に新たに加わったG.W. シュレイヤーは、1922年に来日し、妻のC.L. シュレイヤーは、1957年から1959年に宮城学院女子大学の英語の教師を務めている。シュレイヤーは、1930年に岩手県盛岡に宣教師として赴任して以来、50年以上にわたり、盛岡で布教活動や子女の教育に携わり、夫妻でキリスト教センター善隣館を創設した⁽¹⁷⁾。軽井沢避暑団のハンドブックの1923年版には、名前が載っていないが、1930年以降には掲載されていることから、シュレイヤーの別荘取得も、1924年以降で、彼もまた別の外国人または宣教師の別荘を譲り受けたと思われるが、現時点では確認ができなかった。

6. 1930年以降の別荘の所有の変化

1930年以降、さらに軽井沢避暑団の1936年版のハンドブックを確認すると、この年からミラーの別荘の所有が「盛岡クリスチャンセンター」に代わっている。これは、前述の盛岡で活動をしていたシュレイヤーとの関わりがあるものと考えられる。ミラーは別荘の

所有が変わっても軽井沢を訪れ、ハンセン&リンゼーとの交流を続けていた可能性がある。また、ニコデマスの別荘（No.1307）は、1937年に川端康成が購入している。ニコデマスは、1937年に死去しており、夫人や家族がその機会に手放したと思われる。川端康成氏は、以前からつるや旅館などに逗留しながら軽井沢を訪れており、『雪国』で得た賞金で、1937年に1307番の外国人宣教師から別荘を購入したといわれており、軽井沢避暑団のハンドブックでも、1307番は、1936年にニコデマスから、1937年に川端康成氏へと所有者が移動したことが確認できた（写真9）。

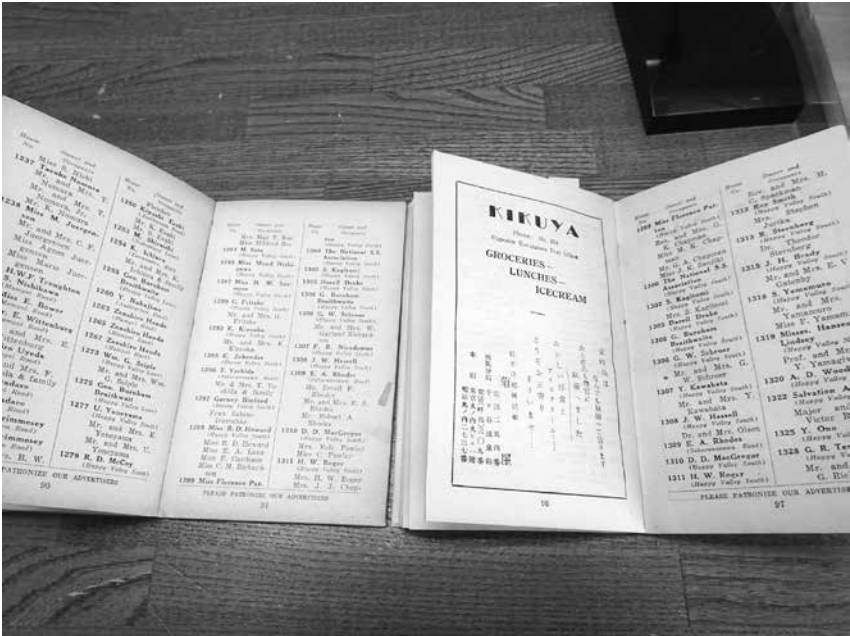


写真9. 1936年(左)と1937年(右)のハンドブックのページ
 1936年No.1307ニコデマス所有の別荘は、1937年に川端康成の所有となった。
 (2018年10月撮影)

ちなみに、1937年の冬には、川端康成氏の別荘を借りて、堀辰雄氏が『風立ちぬ』の最終章「死のかげの谷」を書いたといわれている⁽¹⁸⁾。幸福の谷と呼ばれたこの別荘地は、冬の寒々しい風景とともに堀辰雄の当時の心象風景を表していたのだろうか。川端康成は、1941年にさらにNo.1305 プレスウェイト所有の別荘を購入し、以後の川端康成の別荘として登録されている（写真10）。



写真10. 川端康成別荘写真 ショーハウス記念館に展示されていた写真を撮影
この別荘は1941年に購入した2番目の別荘No.1305に建つものと思われる。
(2017年7月撮影)

7. 戦後の別荘の所有 1985年のハンドブックから

第二次世界大戦の勃発により、多くの米国人宣教師たちが帰国を余儀なくされた。ハンセン&リンゼー両氏も1941年に一度帰国している。彼女たちの軽井沢の別荘はそのままにしていたようである。1947年に再来日して、宮城学院で教鞭をとり学校の復興に尽力した。そして、再び軽井沢での夏休みを取り戻した。1951年にはそれぞれ帰国し、1957年ハンセン&リンゼー両氏は、宮城学院同窓会に対して軽井沢の山荘を寄付した。



写真11. ハンセン&リンゼーの山荘玄関前のスケッチ
(別荘番号1290小谷 明氏より2017年寄贈)

その後、宮城学院同窓会では、東京支部の同窓生が中心となり、ふたりの山荘を守りながら、軽井沢での夏の活動を行い、2008年には山荘が老朽化したため、取り壊しとなり、跡地だけが残った。また、隣接するシュレイヤー館は、1962年に宮城学院が取得したが、この山荘も取り壊しとなった。

宮城学院同窓会が所蔵している軽井沢会のハンドブック1985年版で、宮城学院の宣教師たちの別荘の所有者を調べると、この時期にはほとんどが日本人の所有となっていた。

1992年には、軽井沢の住民有志たちが軽井沢の歴史ある別荘の保存に向けて、軽井沢別荘建築等保存調査会を発足させた。1994年には、軽井沢ナショナルトラストが発足した。この年には、「第一回別荘建築をたずねて」と題した別荘見学ツアーが開催され、地元関係者や大学生たちが参加した。このツアーのコースには、「宮城学院の多角形の別荘」が含まれていた⁽¹⁹⁾。後年、軽井沢ナショナルトラストから、同窓会や宮城学院に対して、山荘の保存に関わる照会があったとのことだが、こうした、歴史的な建築を保存する動きに対応できなかったことは残念であった。

8. 宮城学院軽井沢山荘跡地の現在

2017年と2018年のフィールドワークで、宮城学院同窓会と宮城学院の山荘跡地を訪問した(写真12)。ふたつの別荘地跡は、桜の沢、ハッピーバレーの谷頭部の高台にあり、当時の川端康成氏の別荘地(No.1305)に隣接している。2017年は7月に訪問したため、下草が生い茂り、敷地を囲む木々もうっそうとして、ハンセン&リンゼーが楽しんだといわれる別荘からの眺めはさえぎられていた。現在の管理は、地元の管理会社によって、年2回の草刈を行っているだけだが、旧シュレイヤー館の跡地の宮城学院の看板などは倒れて草に埋もれ、すぐには跡地とは分からなかった(写真13)。



写真12. 宮城学院同窓会 軽井沢山荘 ハンセン&リンゼー別荘跡地
(2017年7月撮影)



写真13. 宮城学院山荘 シュレイヤー館跡地
(2017年7月撮影)



写真14. 宮城学院山荘から桜の沢「ハッピーバレー」を見下ろす。奥に見える別荘は、No.1305川端康成の別荘と思われる。(2017年7月撮影)

ふたつの敷地内を歩き回った結果、道標のような石柱を発見した。ひとつには、「ハンセン・リンゼー」、「シュレイヤー」、「ミラー」と「ブレスエート」と書かれていた(写真15～18)。



写真15. 山荘敷地内の道標 リンゼー・ハンセン



写真16. シュレーヤー



写真17. ミラー



写真18. プレスエート

(写真15. ～ 18. 2017年7月撮影)

隣接するそれぞれの別荘の方向を示すものと思われた。「ブレスエート」は、別荘番号1275、ジョージ・ブレスウエイトで、聖学院学術情報発信システムの黒木 章の論文によると、ブレスウエイトは、1886年に英国聖書協会の代表として来日し、「英国基督教書籍販売会社」の経営を担い、日本各地を旅行し日本でのキリスト教伝道に広く貢献した。大日本帝国憲法や各地の条例を翻訳し、解説を付けたり、全国主要道路地図を含んだ外国人のための旅行案内書を作成した。また、1888年には勝海舟などの援助を受けて東京赤坂病院を建て、特に貧困層の治療に尽力した。そして、1930年に日本で病死したとある。彼の名前は、1917年のハンドブックには記載があるので、ミラーやハンセン&リンゼーとも交流があったと思われる。彼の別荘の位置は、ちょうどハッピーバレーの入り口2本の道の分岐点にあり、それは、山荘への目印として認識されていたものと思われる。

現在、宮城学院同窓会、宮城学院の敷地には、この石柱以外には、当時を思い起こせるようなものはなく、やはり山荘の建物がないことは、とてもさびしく思われた。

9. 軽井沢の歴史の活用について

本研究では、軽井沢における宮城学院に関係した宣教師の別荘所有の歴史を追った。様々な文献や軽井沢避暑団発行のハンドブックに基づいて調査した結果、東北に在任した宣教師たちの中で、軽井沢に最初に別荘を持ったのは、1899年、東華学校のデフォレストであった。そして彼と前後して、モール、ミラー、セイプルが桜の沢に別荘をかまえ、1908年ごろには、宮城学院に関係する宣教師たちが軽井沢で楽しむ様子がハンセンの書簡からうかがえた。その後、1915年にハンセン&リンゼーがミラーの隣に山荘を建てた。モールの別荘は、1924年ごろにニコデマスの所有となり、同じ頃にシュレイヤーがハンセン&リンゼーの隣地にあった他の外国人から別荘を買い取った。1936年にはミラーの別荘は、盛岡キリストセンターの所有となり、1937年にはニコデマスの別荘が、川端康成氏に買い取られた。第二次世界大戦後には、セイプルの別荘が日本人の所有に変わった。ハンセン&リンゼーの山荘は、戦後も彼女たちに所有され、1957年に宮城学院同窓会に対して寄贈された。同窓生たちは、山荘を管理保管し、合宿所として活用していたが、2008年山荘の老朽化のため取り壊され、93年の歴史を閉じた。

かつて宮城学院関係の宣教師たちが夏休みを過ごした軽井沢のハッピーバレーは、現在うっそうとした森になっている。筆者が訪れた2017年7月でも、森の中に点在する別荘に人影はなく、別荘地を歩くのはカメラを持った観光客であった（写真19）。



写真19. 桜の沢ハッピーバレーの佇まい
うっそうとした森の中に別荘が点在し、人影はなく静まりかえっていた。
(2017年7月撮影)

このハッピーバレーの中に、往時の宣教師たちの別荘の姿をしのぶことができる建物があった。別荘番号 1287 の同志社大学「シーモアハウス」である（写真 20）。シーモアハウスの外観を見学したところ、建物は 2 階建てで、外側に杉の皮を貼ったいわゆる「バークハウス」である。玄関前の小さなテラスにはバーベキューセットが置かれ、建物の脇には自転車が数台置かれてあった。同志社大学施設部今出川校地施設課に問い合わせたところ、同志社大学で英語教師をしていた E. シーモアの別荘を所有者から寄付されたもので、現在も大学のセミナーハウスとして使用されていることだった。セミナーハウスは大学の学生、教職員が利用できるが、京都の大学が軽井沢の別荘を直接管理するのは難しいので、現地での宿泊者への受付や建物の管理は地元の会社にまかせてあるとのことだった。また担当者の話から、シーモアハウスの建物の老朽化や、利用者の減少などで、歴史的な別荘建築を保有し続ける難しさの一端も推測することができた。

宮城学院同窓会と宮城学院の場合、山荘の建物は取り壊されて、現在敷地のみとなっているが、山荘があった桜の沢、ハッピーバレーは、明治から大正時代にかけて外国人宣教師による軽井沢の別荘開発の歴史の中心地であり、また、ここで夏休みを過ごした宮城学院に関わった宣教師たち自身がその歴史をつくってきた存在でもある。また、ハンセン&リンゼーの山荘は、宮城学院同窓会が寄贈を受けて、当時の学生や同窓生たちが大切に使用した。

同窓生の何人かに当時のお話をうかがったところ、山荘で初めて、コーヒーとトースト、サラダといった西洋式の朝食をいただいたという思い出に始まり、洗濯や買い物の合間に、静かな軽井沢の中で友とともに聖書を読み、賛美歌を歌った時間の素晴らしさを語



写真20. 同志社大学がセミナーハウスとして利用している宣教師の別荘「シーモアハウス」 (2017年7月撮影)

ってください。彼女たちからは、軽井沢での夏の経験が、学生たち相互の友情と愛校心を育んだことを感じる事ができた。

今回の調査を通してハンセン&リンゼーの山荘と隣接するシュレイヤー館の跡地は、宮城学院の学生たちの思い出の場であるとともに、軽井沢の歴史の一部であるということが良く分かった。今後は、この貴重な場所を活用して、さらに宮城学院の学びの場を作ることも可能であると考えられる。活用の方法としては、①跡地を再整備し、敷地境界線の明確化、記念碑の建立や、説明看板の設置などが考えられる。②これまでの研究の成果や同窓生の声などを掲載した山荘や軽井沢のガイドブックを作成することも可能であろう。③これらを活用し、学習ツアーのフィールドとして活用できる。宿泊は近隣のホテルにして、軽井沢の観光や、軽井沢ナショナルトラストが保存活動を進めている歴史的な別荘建築の見学、キリスト教史、日本文学者の別荘めぐりと軽井沢文学をたどる旅など、テーマは尽きない。これらのテーマが、宮城学院の山荘とつながっていることは重要である。④さらに将来、跡地にセミナーハウスが建てられるようになれば、セミナーハウスに宿泊しながら、③の活動や、会議、コンサート、シンポジウムなど、さらに宮城学院の活動を広げることが可能であろう。

今後は、学校全体で、軽井沢に山荘の跡地を所有していることの意義と価値を深めていくことが望まれる。

おわりに

本研究では、軽井沢における宮城学院に関係した宣教師の別荘所有の歴史を追った。今回の調査を通じて強く感じたことは、この別荘跡地が所在する桜の沢という場が、近代か

ら現代の日本の歴史にとって大変重要な価値を持つということである。それは、明治期からのキリスト教の日本における宣教活動の歴史の一端が存在することとともに、今回の研究では触れることができなかったが、この桜の沢に集った宣教師の中には、太平洋戦争下における対日宣教政策に関わった者もあり、戦後のアメリカの占領統治政策にも影響を与えているという（原；2012）⁽²⁰⁾。

外国人宣教師が明治期から軽井沢に集まった理由として、一般には日本の湿度の高い暑い夏を避けてのことと言われるが、その他にも、軽井沢が当時衰退しつつある宿場町であったことから、空き部屋の存在と、宿場町が備えていた旅人への様々なサービスを柔軟に外国人向けに変化させていくことができたこと、また、鉄道が敷かれてからは、交通の利便性の高い別荘地となったことが大きく、宣教師は教派を超えて夏場のコミュニティをつくり、全国で布教や教育をしている宣教師たちの重要な情報交換の場として発展していったことなどが指摘されている（江川；2015）⁽²¹⁾。このように、軽井沢全体の発展過程についても、研究の余地は多くあると考えられる。

今後は、学校関係者がこの山荘跡地に光を当てて、ハード、ソフトの両面から整備を進め、学校内外の多くのキリスト教関係者や教育関係者、学生たちに開放し、近代日本の歴史の学びの場を創造していくことを期待したい。

謝辞

本研究を進めるにあたっては、宮城学院資料室の前担当西川 淑氏と現担当の佐藤亜紀氏に宣教師や山荘関係の資料を探し出していただき、ご提供いただいた。同窓会の長井祥子会長をはじめ同窓会の皆様には、所蔵の資料をお貸しくださり、軽井沢彫の家具などを見せていただいた。岩井陽子前会長と佐藤美千代氏には、軽井沢山荘の思い出を学生たちに語っていただいた。事務部の太田富美子総務人事部長には、軽井沢に関する地図や資料などをご提供いただいた。ハッピーバレーに別荘を所有される小谷 明氏からは、軽井沢山荘のスケッチや資料をご提供いただいた。同志社大学施設部今出川校地施設課の小楠篤志課長には、シーモアハウスの保存と利用についてお話をうかがった。軽井沢会の軽井沢事務所の田嶋正晴所長には、貴重な軽井沢避暑団のハンドブックの閲覧と撮影を許可いただき、軽井沢テニスコートに関する資料のご提供もいただき、本研究に大きな進展を得ることができた。有限会社一彫堂の代表取締役堀川正久氏には、同窓会室に保管されている山荘のテーブルセットが、一彫堂の初代が手掛けたものであることをご確認いただいた。また、軽井沢彫についての歴史などをご教示いただいた。宮城学院女子大学現代ビジネス学部の渡部美紀子教授には、現地地に同行していただき、現場のディスカッションで様々なヒントを得ることができた。宮城学院嶋田順好学院長には、本学の宣教師についてご教示いただいた。以上の方々にここに記して、お礼申し上げます。

参考文献・参考 Web サイト

- 1) 宮城学院資料室 (2010) 資料紹介「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘」－ハンセン宣教師資料からみる－. 宮城学院資料室年報『信・望・愛』2009年度 第16号, 96－117.
- 2) 宮城学院資料室 (2012) 宮城学院資料室年報『信・望・愛』2011年度・2012年度 第18号・第19号.
- 3) 宮城学院 (2007) 『E・R・プールボー書簡集』
- 4) 関西学院学院史編纂室 (2002) 「ベーツ第4代院長の手紙と写真と油彩画～高山国際村(宮城県)での調査～. 学院史編纂室便り No.16. <http://museum.kwansei.ac.jp/archives/gakuinshi/letter/198/> (2018年2月14日参照)
- 5) 宮城学院資料室『80年史』
- 6) 軽井沢町誌刊行委員会 (1988) 『軽井沢町誌 歴史編(近・現代編)』軽井沢町誌刊行委員会. 754p.
- 7) 軽井沢町誌刊行委員会 (1991) 『軽井沢町誌 民俗編』軽井沢町誌刊行委員会. 336p.
- 8) 中島松樹編 (1987) 『軽井沢避暑地100年』国書刊行会. 196p.
- 9) 宮原安春 (1991) 『軽井沢物語』講談社. 444p.
- 10) 軽井沢町観光経済課 (2018) 「軽井沢案内2018」軽井沢町観光経済課. 71p.
- 11) 佐藤大・斎藤功 (2004) 明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷. 歴史地理学, 46－3 (219), 1－20.
- 12) 櫻井一弥 (2017) デフォレストとは誰か; 重要文化財「デフォレスト館」について, 小特集: 国の重要文化財に指定された「東北学院旧宣教師館」(デフォレスト館). 東北学院史資料センター年報 Vol.2, 10－11.
- 13) 軽井沢避暑団「軽井沢ハンドブック」各年
- 14) 東北学院 (1989) 『東北学院100年史』. 692－695.
- 15) 花里俊廣 (2012a) 戦前期の軽井沢の別荘地における外国人の所有・滞在と対人的環境の様態. 日本建築学会計画系論文集. Vol.77 No.672, 247－256.
- 16) 花里俊廣 (2012b). 1930年頃の避暑地軽井沢における外国人の社会活動. 日本建築学会計画系論文集. Vol.77 No.676, 1283－1292.
- 17) シュレイヤー先生の思い出 ドイツ語会話の先生; 岩手大学のホームページ <http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/german/schraeyer.htm>
- 18) 避暑地の散歩道 幸福の谷・ハッピーバレー軽井沢町; 「信州スタイル」のホームページ <https://shinshu-style.com/karuizawa-region/town-karuizawa/happyvalley/>
- 19) 軽井沢ナショナルトラスト (1995) KARUIZAWA NATIONAL TRUST 軽井沢ナショナルトラストだより. No.1.
- 20) 原真由美 (2012) 太平洋戦争下におけるアメリカ・バプテストの宣教政策に関する

- 一考察. 関東学院大学「キリスト教と文化」. 第10号. 69－80.
- 21) 江川良武 (2015) 別荘地・軽井沢の発展過程の研究 その一—各高原別荘地の比較を通して見るその特殊と普遍—. 信濃史学会「信濃 第3次」67 (8). 563－580.